

佳作

## テーマ…医療と福祉、わたしの体験 「小さなレディーの美德」

東京都・渋谷教育学園渋谷高等学校1年 石原京

今年の初め、私は二人の小さなレディーに出会った。それは私とあるきっかけから、ある患者会の子どもの世話役ボランティアに参加した時のこと。彼女たち姉妹は、まだ小学生にも満たない本当に小さな子どもたちだった。二人の内の妹さんの方は、何も障がいを持たない正常な女の子だったが、お姉ちゃんの方は、数年前、インフルエンザによる脳症を発症し、言葉や行動の速度が遅いなどの障がいがあった。

私が担当だったのは妹さんの方だった。年齢相応の舌足らずな言葉づかいや少し頼りない仕事で、その日のテーマだった「ティッシュボックスのカレンダー」を丁寧に作っていた。好きなキャラクターのシートでデコレーションしたカレンダーを満足気に見せるその姿は、どこから見ても、可愛く幼い女の子だった。カレンダー作りも無事終わり、トイレ休憩になった瞬間。妹さんは素早く席を立ち、お姉ちゃんのもとへ向かったのだ。疑問に思った私がついていくと、お姉ちゃんの手にはハンカチを握らせ、その手を引っ張ってトイレに向かう妹さんの姿に出会った。それは、誰も彼女に頼んでいない彼女独断の行動だった。

彼女の行動はそれだけではなかった。おやつの間では、お姉ちゃんの手を洗わせるためにトイレまで誘導したり、自由時間に行ったからでもお姉ちゃんをかるたのスペースまで誘導し、靴を脱がせて座らせ、かるたの準備を始めた。この一見些細でとても小さな行動は、お姉ちゃんにとって本当に助かるものだったのだ。彼女はまた幼い幼稚園児にして、本当にやるべきことを理解し、自然に行動に移していたのである。

それに比べて一般社会はどうだろう。すべての人々が障がい者を正

しく認識できているだろうか。私は、メディアをはじめとする社会の間違った障がい者に関する情報の伝え方により、ほとんどの人々が、障がい者を特別扱いしながら何かを行うことが美德であると思いきみ、ただそれを行っている自分に満足するだけで終わっていると感じる。障がいを持った人は見世物でも標本でもない。そういう特別な人間だからこそ社会の目にさらし、正常な人の教訓にするべきだという考えは、根本的に違うと思う。障がいを持ったその子のためだけに何か特別なイベントを行うということは、それ自体が偏見であり大人の事情を嫌でも感じてしまう。

障がいを持った方々にとって、一番の難関は日常であるという。障がいがある人は、例えば私たちがほんの数分で行っている着替えも声をかけてもらえないと何十分もかけてしまうし、私たちがご飯を食べるために、食堂に向かうという当然の行為さえも、人に誘導してもらわないと一人でできなかつたりする。これら一つ一つは大きなイベントであるわけではない。それでも毎日行わなくてはならないこれら日常の行為は、彼女たちにとって大きな壁となっているのである。つまり、本当に彼女たちが助けてもらいたいこと、そして私たちが本当に彼女たちの役に立つことができるのは、とても些細なことなのだ。

このボランティアの経験がなければ、私はとんだ勘違いの認識のまま生きていたと思う。その行動で私に大切なことを教えてくれた、私の膝の上で、笑いながらお姉ちゃんとかるたをしていて小さなレディーを心から尊敬し感謝する。